

書 評

G・ティロットソン著『ポープと人間性』

G. Tilitson: *Pope and Human Nature*, Oxford, 1958 (vi+278 pp.).

菊 池 亘

アーノルドによって *versifier* ではあるうが *poet* にはあらずと断ぜられてからポープのほぼ決定的に近い不運がはじまる。もちろんアーノルドのこの態度の背後にはロマン派の詩人たちによるポープのネオ・クラシズムに對する反撥が強く尾を曳いていて、それをあらためてアーノルドがもう一度代辯しなおしたものにすぎない。しかしこのような非難にもかかわらず意外にポープの命脈はとぎれることなく今日までつづいてきていることも見逃すわけにはいかない事實ではあるがだいたいにおいてその當然占めるべき詩人の地位から追拂われていたことは否定できない。二十世紀に入ってきて本國イギリスにおける英文學の再検討、あるいは新しい發見というものが多く出てきた。そのなかでも一九一二年グリアソンによって編さんされたダンの詩集は大きな收穫であったといわなければならぬ。かくして詩的には不毛と考えられていた十七世紀が大きく浮び

あがってくる。これと同じように一世紀くだって十八世紀のポープに對するロマン派の評價への反撥が出てくるのは一九二〇年代に入ってからである。このころ出たポープ研究はL・ステイーブン、J・W・マッケール、L・ストレーチといったところであるがしかしまだ今までのポープ觀の方向を強力に變えるようなものではなかった。このような方向轉換を行なってそれに成功したのは詩人のE・シットウエルが一九三〇年にフェイバー・アンド・フェイバー社から出版した「アレグザンダー・ポープ」であった。シットウエルはこの評論において「肉體のみならず精神も不具である」ポープをイギリスの詩人のなかでも「もっとも愛すべき一人」のすぐれた詩人であることを證明し、ポープの復権をはかったのである。彼女のこの試みは詩人としての鋭い鑑賞力とまたすぐれた學識によって支えられたものだけあって見事に成功したのである。おそらくこれだけ見事にポープの復権に成功した研究ないしは評論は他にない。おそらくこの種のものでは唯一のものかもしれない。だいたいこの方向に沿ってさらにもっと精到な學問的研究がすすめられてきたがそのなかの一つがティロットソンの研究である。彼はその研究成果として一九三八年、オックスフォードから「ポープの詩」(*On the Poetry of Pope*)を出した。これによってポープの詩は全體的に、そして今までにない正當さをもって説かれていた。たしかにこれはポープの詩を正當な形において理解しようとするのにはきわめて大事な研究であり、また讀んでみるとポープへの正しい興味のもちかたを教えられる。こ

れは暫く絶版になっていたが戦後多少の改訂を経て再版された。(筆者の讀んだのも再版のほうである。)さらに一九五八年に至って出されたのがこの書評の對象である「ポーブと人間性」である。

ティロットソンが「ポーブの詩」を出した一九三八年からちようど二十年を経てこの「ポーブと人間性」は出たわけである。したがって二十年の年月という時間的な数字がすでに示しているようにこの研究はおそらく著者の頂点をなすものであろう。この研究のタイトルが示すようにポーブの詩における「人間性」に焦點をしばりながら、さらにポーブの姿を深く掘りさげようというのがその狙いである。もちろんこの焦點の對象である「人間性」というのは「人間の本當の研究題目は人間である」というポーブ自身の有名な文句に關連があることは斷るまでもない。この書は本文は十二章からなり、いろいろな角度からポーブにおける人間の問題が扱えられていて、それに本文とはやや關連のうすい付録が二章つけられている。

ポーブは人間を中間的存在として扱っている(「人間論」二・三一—一六行)。ここにある人間觀にはじつにたよりない、無力な存在として人間が提示されている。その無力的存在は「生れてはくるものの死ぬためであり、理性を働かしてみてもそれは誤りをおかすだけであり」(九行)として一種のニヒリズムをひびかせ、おそらくこれは自嘲に裏付けられたものであるうことを考えてみればここにはむしろ近代性すらはつきりと讀みとれそうである。さらにつづけて「この世の榮光、笑い草、そし

て謎」(二六行)といわれるとハムレットの有名な人間讚美の獨白がいかにうつろにひびくことであるか。ティロットソンはこのあたりを人間の文學においてその敵を見ない(三一頁)といっているがまさにその通りである。このような何物にもわずらわされない非情の眼を備えたポーブは何よりも人間であることを願っていた。「どうか私は何でもいい、世のいう人間(Mensch)といふようなものでありたい」という願ひは渾身の力をこめた「いづくか病氣してきたからといってすっかり人間でなくなつたわけではありません。……病氣になれば横になりますし、よくなれば起きだします」というポーブの人間であろうとする努力によって支えられている(三三頁)。おそらくここまでポーブの悲願の人間らしさを掘り上げてみせたのは著者が始めてであろう。このようなポーブは人間の死を「自然のものごと」(三八頁)のなかにおいて扱え、これを「宗教的な關心事」(四四頁)として考へている、すなわち彼は己れの死に對しては宗教的な態度をもつて用意している——「私にはこの世の喜びはないのか? あるいは(まじめに言つて)私には仕える友もなく、救うべき魂もないのか?」(「アーパスノット博士への書簡」二七三—四行)これだけ自己の魂の奥底を覗いてみた詩人はそう多くはあるまい。したがってポーブとしばしば結びつけられる理性にあまり力を入れて考へるわけにはいかないであろう。ポーブ自身理性を「人間が行動したいと思ふその態度を批判する力」としてうけ取っている——「一つの聲があつて私の耳にささやく、(それは理性の聲だ。)(「ホラチウスの模倣」(四六

頁) ポープにとっては理性もやはり自己が魂を見つめる時の一手段にすぎないのではなからうか。

「やれやれ! なんて矛盾した動物だ、人間というやつは? 一番いいところの魂だって、なんてグラグラしているじゃないか、また、身體の骨組だってなんて變りやすいものじゃないか? 魂の堅固さも、いろいろな考えでゆすぶられ、身體の氣質はいろいろな風の吹き合に左右される。心のなかにはなんという四月の陽氣! 一言で人間をまとめてみれば一つの強力な矛盾體(二二四頁)とポープがいう時これも己れの魂を凝視することから出てくる言葉であることを悟ってみればわれわれは人間ポープに誠實と近代的な不安をみとめることによつて一層の親しみを感ぜないわけにはいかないであらう。大ざっぱにいうとティロットソンの研究はこのようなもつとも大事な(しかも今日まで不幸にも無視されてきた)ポープの本質を鋭く深く突いている。ここにおいてわれわれはポープ非難を招いた大きな原因はポープの詩の形式などという意外に淺いところにあつたのを知るのである。(さらにティロットソンの研究と共にポープ再發見に新しい大きな貢獻をしていると思われる G. W. Knight: *Laureate of Peace, on the Genius of Pope* (Routledge, 1954) もあわせて見落すべきではないと思われるので當面の範圍を出るがその存在だけをちょっと書きそえておく。

(一橋大學助教授)